

し此の傳説は誤りなる事いぢるし。

○今町邊怪異

加藤惟寅の蘭山私記に、寶曆五年三月尾張町・今町邊、天狗の所業なるか、晝夜礫を打つ事甚敷不止。といふ事見られたり。按ずるに、白山記に、寄宿加賀室云々。其室一人僧正住矣。夜半許有大聲。告曰。汝出室云而。以石打室。僧迷悶不出。又重打之。彌爲恐不出。屢又投擊土石如雨。とあるも、天狗の所爲とかいふべけれど、右は白山嶺上の室堂にての事なれば、神異の祟りならんか。後世天狗の所爲とて、礫を打つなどいへる事折々あり。實に天狗てふものあるにや。年譜にも、寶曆五年三月尾張町今町の地邊天狗打礫晝夜甚し。と記載して、此の頃の珍事とす。

○丁金小路

下今町より枯木橋へ出る間なる入込の小路をば、ていきん小路と呼べり。昔より此の地に、丁金と稱する革細工人數代居住する故なりといへり。

○革師丁金傳

丁金と呼べる革細工人は、越中屋八郎兵衛と稱し、數代此

の地に居住せしかど、廢藩の際明治の初頃、家屋を賣却して此地を退去せりと云ふ。三州志來因概覽に、佐久間盛政の頃は枯木橋邊町端なり。故に後々まで革工の徒此に居すと云ふ。一説に、今丁金と云ふ革細工人なども其の徒の一人なりと云へりと。三州名跡誌には、淺野川掛作と呼べる地は、佐久間玄蕃の時代は礫場にて、此の所穢多筋の革細工人能正六左衛門等居住すといへり。金城深秘録に、松原町は昔町端にて、穢多の居所なりしを、枯木橋へ追出し、其の跡へ御門前町を追出す。とあり。世俗に丁金と呼べる革細工人は、穢多の末などいへれど詳かならず。此の地邊往古は町端にて、穢多共の居住地なりといひ傳ふる故に、穢多の子孫の如くいへるなるべし。按ずるに、雍州府志に、大小鼓革、京師二條加賀屋井鳥丸三條南賣之。元出自加賀國。其製之人謂丁金。彼所張爲良。と見え、天和三年十二月吾が藩の達書に、大鼓の革・太鼓の革は奈良宜しき由。小鼓之革は當加賀國之外は不宜由。然處脇々へ能き革共出し申由相聞え候。自今以後小鼓の革は、他國へ指出候儀停止被仰出。とありて、小鼓の革は加賀の製産をば最

上とすといへり。但し其の革細工人をば丁金と稱する名義の起は、いかなる由縁なるか未だ詳ならず。

○尾張町

此の町は十二冊定書に載せたる金澤通町筋町割附に、三町二間五尺尾張町。とありて、元祿九年の本町肝煎裁許附に、尾張町・橋場町・下博勞町を一裁許とす。按ずるに、三壺記に、寛永十二年五月九日犀川河原町より出火し、南町・石浦町・堤町・尾張町・新町・中町等悉く焼失す。此の時町中を惣構の外へ屋敷替命ぜられ、町割調ひたり。とあり。されば此以前は、尾張町も大手先の近邊にありたりけん。變異記に、寶永三年二月五日尾張町・枯木橋切に焼失家數九拾七軒。此の時より金澤市中夜一時廻番始るといふ事見えたり。

○尾張町來歴

此の町名の濫觴、舊藩中諸記録に記載する由來、其の傳説區々にて、正説詳かならず。有澤武貞の金澤細見圖譜に云ふ。尾張町は、其の初め藩祖利家卿尾張荒子より越前府中へ供奉し來る人々、能登へ入部し給ふ時、七尾へ引越す故

に、今所口に尾張町の名あり。是則ち其の居跡也。さて加賀二郡を拜領し給ひ金澤入城の頃、所、口より供奉し來る人々、多分此の町に家作して居住す。故に亦尾張町と町名を呼べりと。また傳伽雜談には、尾張町は荒子引越の足輕小者の住處也と見え、加府事迹實録には、尾張町は利家卿尾州荒子より被召連下人の住所也。故に尾張町と呼べりと。又三州名跡誌には利家卿金澤入城の時分、尾張荒子にて御用向を承りける町人共をば召寄せられ、爰に居住せしめらる。紙屋庄三郎等是なりとあり。今按ずるに、右傳説共の中にも、名跡誌にいへる荒子より召寄せられし町人共の居住を命ぜらるとの傳説は實説ならんか。若し然るならば、菅家見聞集に、慶長十九年に尾張町大坂屋丹齋といへる藥種商賣人、毒藥を商ひたる罪に依りて、重刑に處せられし事見たり。此の大坂屋など、若しくは藩祖入城のはじめ召寄せられし町人共の一人ならんか。彼の紙屋庄三郎が祖先も、元と尾張の人にて、後加州に來り、金澤に居住せしよし、靜家庵主行狀に記載せたり。

○淺野屋傳右衛門傳